

佐伯真一教授を送る

山 本 啓 介

佐伯真一先生は一九九五年四月に本学に着任された。その時のことを筆者は良く覚えていいる。一月には阪神淡路大震災があり、三月には地下鉄サリン事件があった。若輩者の私がなぜ佐伯先生の御着任の年を覚えているのかというと、私はその年に本学に入学し、当時新任の佐伯先生の文学研究法の講義を受けたからである。五年前に私が本学に着任し、形の上では同僚となるまでのおよそ二十年余り、長きにわたって佐伯先生は私の先生であった。だからここからはただ「先生」と書くことにする。退任記念号は、同僚教員が退任教員を見送る文を執筆することになっていいる。本拙文もそれに倣うものであるが、同僚としてよりも学生から見た先生の部分が多くを占めてしまうことを、どうかお許し願いたい。

学生時代からの思い出は尽きない。当時とはにかく何も知らずに、恥ずかしい質問も多々した。先生は、どれほど学生が無学であつてもそれにあきれる様子もなく、常に穏やかに丁寧に

指導してくださった。忘れたたいのは、レポート返却である。当時は通年授業だった。先生は前期提出レポートに対して、後期の授業で一人一人に対してコメントを付して返却してくだるのが常であつた。私の稚拙なものにも丁寧な御指導をいただいたはずだが、それについては残念なことに思い出せない。ただ、ひたすら覚えていいるのは、恐れおののいたことである。提出したレポートに対して、時に先生が「この文章を自分で読んでみてください」この言葉はどういう意味か説明してください」と、学生に問いかけることがあつた。これも委細は忘却したが、要するにその文や用語はとでも学部生ではひねり出せないような専門的なものであり、つまりはどこかしらの書物から抜き出して自分のもののように偽装したものであつた。問いかけられた学生は読み上げも説明もできずに、脂汗をかいて徐々に小さくなってゆく。そして、先生は「これは〇〇先生の〇〇という書の〇〇ページですよ。知らなかったかもしれないけれど、あ

なたがしたことは盗用と言います」と静かに告げて、今後気をつけるようにと穏やかに諭すのであった。小心にして少しは真面目であった私は、同じような同級生達とわななくわななく畏敬の念をもってその教えを聞いていた。かつては博覧強記のなせるわざとは思っていなかったが、ある時に、万が一間違えてはいけないので、すべて一応確認した上でしてよ、と聞いたときにはさらに驚いた。学生のレポートにそこまでできるのだろうか。真摯に先行研究に向きあうことなくして、本当の学問はない。研究の基本中の基本を、どの学生にも徹底して伝えるためであった。先生のように膨大な記憶を自在に駆使するのは無理だと思い、私はいつしか文字数の少ない和歌研究の道へ進んだが、学問の入り口の頃に、その教えに出会えたことは、返す返すも幸せであった。同僚となつてからその思い出を先生に話したことがある。すると先生は「あれはね。今もねちねちやっているんです」と少し恥ずかしそうに仰っていた。

いったいどこにそんな時間があるのだろうか。先生は着任後まもなく論文集『平家物語遡源』を出版。その頃から並行して延慶本『平家物語』の注釈の会の取りまとめもされた。多くの若手研究者とともに、膨大な資料に基づく緻密な注釈を施した研究成果は『延慶本平家物語全注釈』として二〇〇五年に第一巻が刊行され、ついに本年度刊行の第十三巻を以て完結した。その傍ら先生は「一般向け」と仰る本も執筆されている。二〇〇五年の第三回角川財団学芸賞を受賞した『戦場の精神史

―武士道という幻影―』は『平家物語』などの軍記を虚心に読み解くと、「武士道」なるものがいかに創られた幻想であったか、を鮮やかに映し出したものである。「一般向け」として誰にでも読みやすい文章ながら、膨大な精読を積み重ねた碩学でなければ到底まとめることができない。先生の研究は常に資料の丁寧な読解に基づく冷静な分析から成るが、拝読しているとその奥に静かな怒りを感じる時があった。それは、ある時点での誤読や恣意的な読み換えによつて、いい加減なイデオロギーが生み出され、それがいつのまにか独り歩きして社会を誤った方向へ誘導してしまうこと、例えば近現代に醸造された「武士道」という幻影が一億玉砕や特攻精神にまで繋がってしまったことへの義憤といつてよいだろうか。もちろんそれは整った文章の中には記されてはない。一読者として感じただけである。

その先生が、定年を迎えられる。周知の通り、出口の見えないコロナ禍の中である。大地震とテロの年に着任され、こうした状況で本学を後にされる。中世文学研究者らしい生き様がある。中世の文学者達が動乱の中でも作品を残したように、本年には論文集『軍記物語の合戦と心性』を刊行され、さらに精力的に研究を続けておられる。御定年を寂しいという気持ちには不思議とまだない。残念なのは、せっかくお隣の研究室になったというのに、さほど飲み会もできないままで、送別会も催せないことである。学生のころ、先生の教授昇進祝いをゼミ生達で開いたことがある。「君たちは何か理由をつけて飲みたいだ

けでしょう」と喜んでつきあってくださったことも忘れがたい。はい、みんな先生と飲みたかったのです。先生の学問と人柄を慕う学生や研究者は学内外に数え切れない。本号に寄せられた中世関連の論文は、その教えを受けた方々のものである。先生はきつとこれからも益々精力的に御研究を続け、ふらつと大学にもお見えになるだろう。やがて世静まりなば、先生をお誘いし、盛大な宴を開くことが今から楽しみである。